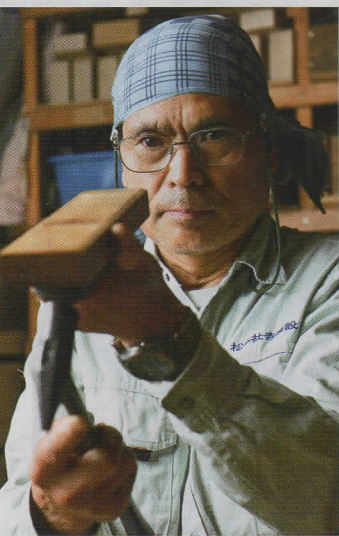


宮大工

寺社をはじめ、文化財の修復を手がける宮大工。法隆寺から始まる伝統建築の雛型と原点を今も頑なに守り続ける。

松本高広さんは、20歳のとき、宮大工を目指し、法隆寺の棟梁西岡常一氏を訪ねたが弟子入りは叶わず、東京の文化財建築工務店を紹介してもらい、入門。さっそく三重塔建立現場に参加し、以後15年間、社寺仏閣の技術を学んだ。現在、松本社寺建設の棟梁として鎌倉の社寺修復を中心に手がける。松本社寺建設
神奈川県鎌倉市二階堂710
瑞泉寺境内
☎0467-23-1965



すべての道具は宮大工にとっての命です。鉦かね(写真奥)、墨指金さしがね(写真奥から二つ目)、墨壺すい(写真奥から三つ目)は、宮大工三種の神器で、最も大切なものです」と松本高広さん。

大工道具のうち、鉋かんなの台、鉦などの柄や墨壺も自らつくる。細かな作業が求められ、最高の出来栄を目指するために、道具もそれに見合ったものが要求されるのだ。

大工の道具は時代を経るごとに洗練され、使いやすくなっているが、歴史ある建造物は、あえて昔の道具で修復している。そうしないと、もともとの建物とは別のものになってしまうと、松本さんは言う。

「それが、先人から受け継いだ本物の技を伝える宮大工の使命です」

